

上ノ方ニシテ私ノ炭ヲオケバ、格別ニアラタマリテ本意モタチ、私ノ炭ノカヒモミユル也、今日ノ道安ガ炭ノヤウニテハ、最前ノ炭トカハリナキヤウニテ面白カラズ、第一初手ノ炭ト模様ノカハルヤウニスルコト第一ナリ、初後ノ炭モ同ジコトナリ、今日ナドノ道安ガ白炭ノアシライ、全ク初ト同ジコトナリ、初ニ本ニアシライタルハ、必ズ標ノ方ニシ、初メニ標ニシタル方ヲ、必ズ本ノ方ニスルヤウニアシラヘバ、自ラ姿モカハルナリ、サテ炭ハ第一ベタリトナラヌヤウニ、インガリトナルヤウニラケバ、ヲコリモ早シ、見聞モミゴトナリ、第一白炭ノベタリトシタルハ、何ノ詮ナキモノナリ、インガリトオクヤウニスベシト仰ラル、

〔茶話指月集上〕一ある時道安、我宗且千をつれて古織の茶湯にゆきしが、亭主鏤の間にて炭所望あり、安灰土鍋ホウをひきよせ、爐中をとくと直して後炭を置ク、その炭ことに興に入ル、予歸路におよんで、織部は今の宗匠なるに、爐中の直し以外の外に覺え候といへば、安よし宗匠にもあれ、何にもあれ、爐中あしくては炭が置れぬといひし、

〔雍州府志土六産炭〕炭 所々出然於山城國鞍馬山并小野里之産爲宜、是俗稱燒炭、又茶亭爐中之所用是謂切炭、攝津池田丹波一倉土人燒之、柞木或櫟木、隨其木之狀、長三尺許伐之、連皮燒之、而後或五寸、或三寸、任心以鋸截之、是謂切炭、其圓大者謂胴炭、置是於爐中央、自是左右比並小炭、猶入身之胴加手足、或其大者薄切之、其狀如車輪、是號輪炭、或半割而用之、謂割炭、又河内國光瀧土人、伐樹枝五七寸許、連小枝而燒之、其色白灰色也、是稱白炭、又謂細炭、雜置黑切炭之間爲爐中之飾、今躑躅枝、又連葉松柯、連葉竹枝、燒用之、

〔和漢茶誌二〕炭記月令、季秋、乃命伐薪爲炭、中春至初秋、所製者劣、

丁謂茶圖曰、黑謂烏金、白謂烏銀也、取櫚皮柞木爲之、櫚皮櫟也、實謂櫟實、或者夫云、出山本國、櫚柞、多出於攝州丹州之諸山、生攝州者、其勢強、其香長、生丹州者、其勢弱、其香短、且桑槐桐檉栢